

FUJITA Mao × MUKAWA Keigo

VS

Recital Series

Vol. 6

2023.2.20[月] 19:00 開演
東京芸術劇場コンサートホール

藤田真央 (ピアノ)
FUJITA Mao, Piano

務川慧悟 (ピアノ)
MUKAWA Keigo, Piano

Program

ドヴォルザーク／スラブ舞曲集 第1集 作品46

Antonín Dvořák: Slavonic Dances Op. 46

- 第1番 ハ長調 - プレスト
- 第2番 ホ短調 - アレグレット・スケルツァンド
- 第3番 変イ長調 - ポーコ・アレグロ
- 第4番 ヘ長調 - テンポ・ディ・メヌエット
- 第5番 イ長調 - アレグロ・ヴィヴァーチェ
- 第6番 ニ長調 - アレグレット・スケルツァンド
- 第7番 ハ短調 - アレグロ・アッサイ
- 第8番 ト短調 - プレスト

No. 1 in C Major - Presto
No. 2 in E Minor - Allegretto scherzando
No. 3 in A flat Major - Poco Allegro
No. 4 in F Major - Tempo di menuetto
No. 5 in A Major - Allegro vivace
No. 6 in D Major - Allegretto scherzando
No. 7 in C Minor - Allegro assai
No. 8 in G Minor - Presto

1st: 務川、2nd: 藤田

ラヴェル／ラ・ヴァルス

Maurice Ravel: La Valse

1st: 務川、2nd: 藤田

休憩 (20') Intermission

ラフマニノフ／交響的舞曲

Sergei Rachmaninoff: Symphonic Dances

- 第1楽章 ノン・アレグロ
- 第2楽章 アレグロ・コン・モート (ワルツのテンポで)
- 第3楽章 レント・アッサイ - アレグロ・ヴィヴァーチェ

I. Non allegro
II. Andante con moto (Tempo di walse)
III. Lento assai - Allegro vivace - Lento assai

1st: 藤田、2nd: 務川

Profile

©Devlie Semokas



藤田真央 (ピアノ)
FUJITA Mao, Piano

2017年、18歳で第27回クララ・ハスキル国際ピアノ・コンクール優勝。併せて「青年批評家賞」「聴衆賞」「現代曲賞」の特別賞を受賞。

2019年チャイコフスキー国際コンクールで第2位を受賞し、審査員や聴衆から熱狂的に支持され、世界の注目を集めた。

繊細かつヴィルトゥオーゾを持ち合わせ、自然体で奏でられる唯一無二の美しい音色が高く評価され、次々と世界の舞台に招かれる。ルツェルン音楽祭、ヴェルビエ音楽祭、ラ・ロック＝ダンテロン国際ピアノフェスティバル、ツィナンドリ音楽祭など主要な音楽祭へ定期的に出演。2023年1月には、カーネギー・ホールにてホール主催のソロ・リサイタルデビューを果たす。最近および今後共演のオーケストラは、ゲヴァントハウス管、ベルリン・コンツェルトハウス管、ミュンヘン・フィルハーモニー管、ロイヤル・コンサートヘボウ管、フランス放送フィル、ロイヤル・フィルハーモニー管、イスラエル・フィル、RAI国立響、ミラノ・スカラ座管、読売日本交響楽団、東京都交響楽団。さらにはクリストフ・エッセンバッハ、リッカルド・シャイー、アンドリス・ネルソンス、ヴァシリー・ペトレンコといった指揮者たちからの信頼も厚い。

公式ウェブサイト <https://maofujita.com/>

©Yuji Ueno



務川慧悟 (ピアノ)
MUKAWA Keigo, Piano

2021年世界三大コンクールの一つである、エリザベート王妃国際音楽コンクールにて第3位受賞。2019年にはフランスで最も権威のある、ロン＝ティ

ボー＝クレスパン国際コンクールにて第2位受賞。長い歴史と伝統のある2つの国際コンクールの上位入賞で大きな注目を集め、現在、日本、ヨーロッパを拠点にソロ、オーケストラとの共演、室内楽と幅広く演奏活動を行っている。

バロックから現代曲までレパートリーは幅広く、各時代、作曲家それぞれの様式美が追究された演奏、多彩な音色には定評がある。また現代ピアノのみならず、古楽器であるフォルテピアノでの奏法の研究にも取り組んでいる。2022年7月よりフォルテピアノの演奏シリーズを定期的に行っている。

東京藝術大学を経て、2014年パリ国立高等音楽院に審査員満場一致の首席で合格し渡仏。ピアノ科第3課程を修了、室内楽科第1課程修了。現在は国内外での演奏活動の傍ら、フォルテピアノ科に在籍し研鑽を積んでいる。

最新アルバム:「ラヴェル:ピアノ作品全集」
2022年11月30日にリリースし、好評を博している。

公式ウェブサイト <https://keigomukawa.com/>

藤田真央と務川慧悟の 「ダンス・ダンス・ダンス」

宮本明 (音楽ライター)

ドヴォルザーク

スラヴ舞曲集 第1集 作品46

約35分

「皆さんの心躍る舞曲を集めたら面白い!」
と思い選曲しました。いずれの作品も舞曲な
らではの愉しさを持つ一方、それぞれに異な
る歴史背景や国民性を備えているので、テ
イストやカラーの違いを楽しんでほしいです
ね」

今回の選曲を任された藤田真央がそう語
るように、プログラムは3つの「ダンス」で構
成されている。

チェコ国民楽派の代表的作曲家アントニ
ン・ドヴォルザーク(1841～1904)の《スラ
ヴ舞曲集 第1集》は1878年の作品。遅咲
きの苦勞人だったドヴォルザーク36歳の出
世作だ。

無名だったドヴォルザークの才能を見出し

たヨハネス・ブラームスの口添えで《モラヴィ
ア二重唱曲》を出版したドイツの出版社ジム
ロックが、その予想以上の成功を受け、当
時大人気だったブラームスの連弾曲《ハン
ガリー舞曲集》のチェコ版を依頼して生まれ
た。“2匹目のどじょう”を狙ったわけだが、
こちらも大当たり。すぐにオーケストラ版を追
加オーダー。8年後には第2集(作品72)も
作られた。

ドヴォルザークがブラームスと違ったのは
民俗舞曲の扱い方だ。ブラームスが素材の
旋律に和声付けした「編曲」であったのに対
して、ドヴォルザークは「作曲」。リズム・パター
ンなど、原曲の特徴的な要素だけを用いて、
自由に創作している。伝統音楽のスタイルを
借りた、ドヴォルザーク・オリジナルの“スラ
ヴ風”舞曲なのだ。

ちなみに、歴史的にチェコをほぼ二分し
ているのがボヘミア地方とモラヴィア地方(あ

とは面積の小さいシレジア地方)。ドヴォル
ザークはボヘミアの出身だ。一方「スラヴ」
は、スラヴ系の言語を話す人々の暮らす地
域を指す。東はロシア、ウクライナから西は
チェコ、ポーランド、南は(ハンガリー、ルー
マニアをまたいで)ブルガリアまで、広範な
地域に及ぶ。19世紀にはスラヴ民族の連帯
統一を掲げる汎スラヴ主義の気運が高まっ
ていた。ドヴォルザークは、いわば音楽の
汎スラヴ主義を推進した作曲家で、《スラヴ
舞曲集》も、この第1集は多くがチェコの音
楽によっているが、第2集ではさらに広くスラ
ヴ各地の民俗舞曲を取り入れている。

モデルとなっているのはおもに下記の民俗
舞曲。

第1番 フリアント(ボヘミア) 2拍子と3拍
子が絡む熱狂的な変拍子の舞曲。

第2番 ドゥムカ(ウクライナ) スラヴ諸国に
広く行き渡った哀悼歌。

第3番 ポルカ(ボヘミア) ウィーン音楽で
有名なポルカも起源はボヘミア。

第4番 ソウセツカー(ボヘミア) ペアで踊
る緩やかな3拍子の踊り。

第5番 スコチナー(ボヘミア) 躍動感あふ

れる2拍子の快活な舞曲。

第6番 ソウセツカー(ボヘミア)

第7番 スコチナー(ボヘミア)

第8番 フリアント(ボヘミア)

各曲ともリズムやテンポの自由な変化に豊
かな民俗性がにじむ。務川慧悟は、「オケ版
より連弾のほうが、ダンスの微妙なリズムの
揺れを表現できるはず」と教えてくれた。

ラヴェル／ラ・ヴァルス

約12分

「La Valse」は「The waltz = ワルツ」の
意味。ウィンナ・ワルツへのオマージュとし
て着想した作品だ。務川は言う。

「フランスのエスプリと本格的なウィンナ・
ワルツの優雅な雰囲気という二面性を持つ
作品。最もよく弾かれる2台ピアノ曲のひとつ
ですが、技巧的には非常に難しい複雑な
曲です。その難しさをクリアしたうえで、ウィ
ンナ・ワルツの感覚を二人で柔軟に共有しな
ければなりません」

昨年11月にモーリス・ラヴェル(1875～
1937)のピアノ独奏曲全曲CDをリリースし

ている務川。彼にとって、まさにそんな多面性こそがラヴェルの魅力だという。ただ、同時にそれが、ラヴェルの理解を難しくしている要因だと思う、とも。

作品はバレエ・リュスのセルゲイ・ディアギレフの依頼により、バレエ音楽として作曲された。1920年2月にまずピアノ独奏版とこの2台ピアノ版が仕上がった。2種のピアノ版にはおそらく、オーケストラ版を見据えた検討用の意味もあったのだろう。ほどなく4月にはオーケストラ版も完成。10月23日にラヴェル自身とアルフレード・カゼッラによって2台ピアノ版が初演され、オーケストラ版のほうは12月12日に、バレエとしてでなく、ラムルー管弦楽団の演奏会(カミーユ・シュヴィヤール指揮)での初演となった。

初演がバレエ上演でなかったのはディアギレフが作品を気に入らなかったから。2台ピアノ版による試演を聴いた彼は、「傑作だがバレエ曲ではない。バレエ曲の絵だ」と皮肉っぽく否定し、バレエ・リュスでの上演は白紙となった。だが《ラ・ヴァルス》は人気曲となり、やがて当初の意図どおりバレエとしても上演される。最初のバレエ上演は現在、

1926年10月2日にアントワープのフランダース王立歌劇場で行なわれたという説が有力だ(従来は「1928年パリ、イダ・ルビンシュタイン一座」など諸説あった)。

渦巻く雲の合間にワルツを踊る人々の姿がちらちらと見える。雲は次第に消え、広いホールに大勢の人がひしめいている。シーンは徐々に明るくなっていく。シャンデリアの光がフォルティッシモで炸裂する。1855年頃の宮廷。

これはラヴェルが楽譜の前文に寄せた、曲のイメージを示す文章。

曲は切れ目なくつながった「序奏」+「複数のワルツ」+「コーダ」という、ウイナ・ワルツの定型を踏襲している。ワルツは7つ。第1ピアノの左手の低いトレモロで始まる序奏は、まさにラヴェルの描写どおり、垂れ込める暗雲のよう。やがて登場するワルツの断片がちらちらと、徐々にはっきりと姿を現すと、第2ピアノの回転するような分散和音に乗って、第1ピアノが最初のワルツを奏で始める。ラヴェルが「シャンデリアの炸裂」と書いて

いるのはこの第1ワルツの最後、2台のピアノが同期して和音を叩く部分のこと。初めて登場するff(フォルティッシモ)なので確かに“炸裂”かもしれないが、実はこのあとさらに、より激しい爆発が待っている。

以下7つのワルツが幻想的に扱われたあと、序奏の“暗雲”が戻ってきて後半が始まる。前半に登場した各ワルツの主題を再現して組み込むウイナ・ワルツのコーダと同様の設計なので、この後半全部をコーダと呼ぶなら、全755小節のうちの315小節を占める長大なコーダということになる。ワルツ主題は音価(長さ)を変え、調を変えて組み合わせられ、何度かのクライマックスを迎えたあと、最後は狂気じみたクレッシェンドで崩壊する。

ピアノ版とオーケストラ版とは、もちろん基本的に同じ作りだが、たとえば一番最後に繰り返す同一音型の回数が、ピアノ版→8回、オーケストラ版→6回など、細部の構造はわずかに改訂されている。

ラフマニノフ／交響的舞曲

約 33 分

「今日は次第に分厚くなっていくプログラム。ラフマニノフは全力投球の真っ向勝負です」と務川。

今年生誕150年のセルゲイ・ラフマニノフ(1873～1942)。その最後の作品が1940年作曲の《交響的舞曲》だ(オリジナル曲以外では、この翌年、チャイコフスキーの歌曲〈子守唄〉をピアノ用に編曲している)。

ラフマニノフはこの曲をバレエとして上演することを見据えて構想しており、実際、前年に《パガニーニの主題による狂詩曲》(1934)をバレエ化して成功を収めた振付師ミハイル・フォーキンとの間で計画が進んでいたようだ。文字通り「舞曲」だったわけだ。1942年にフォーキンの死でそれが実現できなくなった時には、かなり消沈したという。

《交響的舞曲》は1940年8月に、まず2台ピアノ版の形で完成した。直後に指揮者ユージン・オーマンディへの手紙で、これからオーケストレーションに取りかかるので初演してほしいと願い出ている。9～10月に完成したオーケストラ版は、翌年1月にフィラデルフィアで、オーマンディ指揮フィラデルフィア管弦楽団により初演された。その初演



STEINWAY & SONS

比類なき芸術性がもたらす 心満たされる暮らし



スタインウェイ & サンズ 東京
港区北青山3-4-3 ののおやま1F
TEL 03-6721-1618 営業時間:11:00~19:00
www.steinway.co.jp/SST



お問い合わせはこちら

に向けてラフマニノフがピアノを弾きながらオーマンディに曲を説明する様子を収録したプライベート録音が存在する。円盤式録音機で隠し撮りされたものらしい。

一方、先にできていた2台ピアノ版だが、その初演はウラディミール・ホロヴィッツとの共演で行なわれたと言われている。完成後すぐの8月にロングアイランドで、あるいはその2年後の夏にラフマニノフの最後の家となったビバリーヒルズの自宅で。いずれにしても私的な小さな集まりでのことだったようだ。

作品は全3楽章。最終的には破棄したものの、当初は各楽章にタイトルがあった。「真昼」「黄昏」「真夜中」(一説には「朝」「昼」「夕」とも)。バレエの構想ゆえのイメージだったのかもしれないし、老境を迎えた作曲家が、自らの人生を振り返ったものと考えられるのも不自然ではないだろう。作品には、交響曲第1番など、過去の自作に関連した多くの引用がある。

第1楽章 短い序奏部に続く第1主題は、足を踏み鳴らすような行進曲調。一転、第1ピアノが奏でる第2主題は憂いを帯びた美しい旋律。オーケストラ版ではアルト・サクソフォンが吹いている。ラフマニノフの全作品中

でサクソフォンを使っている唯一の部分。特別な思いが込められているはずだ。第1主題が再現されたあと、穏やかなコーダ。第1ピアノの右手に交響曲第1番(第1楽章第1主題)が登場。23歳のラフマニノフが初演の大失敗に打ちのめされ、復活に3年を要したという、いわくつきのあの曲だ。

第2楽章 8分の6拍子の暗鬱なワルツ。悪魔の踊る死の舞踏だ。

第3楽章 グレゴリオ聖歌の「怒りの日」が執拗に、しかしときに軽快に、あるいは透明に変奏されて聴こえてくる。多くの作品に用いられている、ラフマニノフのトレードマークのようなモチーフ。それと拮抗するように対置されている重要な主題がロシア正教の伝統的な聖歌であるズナメニ聖歌。1915年作曲の合唱曲《晩禱(徹夜禱)》の第9曲で用いた聖歌(主よ、誉め称えられよ)の旋律が繰り返し登場する。キリストの復活を歌う内容(オーケストラ版では、該当する歌詞の「アレルヤ(神を賛美せよ)」の文字も添えている)。「怒りの日」は最後の審判だから、いわば死と生の相剋。それを乗り越える復活の讃歌だ。



東京芸術劇場は、
芸術文化活動にご賛同いただいた
パートナー企業の皆様のご支援により、
今年も芸術文化の発信につとめてまいります。

当劇場の年間事業運営に賛同し、ご支援くださっている企業・団体のみなさまです。

アサヒグループホールディングス株式会社
住友生命保険相互会社
Bloomberg L.P.

キッコーマン株式会社
株式会社リナー教育

株式会社イープラス
池袋西口商店街連合会
株式会社ヴォートル
オルガノ株式会社
香山壽夫建築研究所
国際興業株式会社
株式会社 サンシャインシティ
三精テクノロジー株式会社
サントリーホールディングス株式会社
株式会社ジェイアール東日本ビルディング
西武鉄道株式会社
第一生命保険株式会社
株式会社 竹中工務店
多摩美術大学
株式会社テレビ朝日

株式会社テレ・ポーズ
デンカ株式会社
東京臨海熱供給株式会社
東武鉄道株式会社
株式会社東武百貨店
凸版印刷三幸会
トヨタ自動車株式会社
西池袋熱供給株式会社
日本生命保険相互会社
東日本旅客鉄道株式会社 池袋駅
びあ株式会社
株式会社 フジテレビジョン
ホテルメトロポリタン
株式会社 松村電機製作所
丸茂電機株式会社

三井金属商事株式会社
三菱地所株式会社
株式会社三菱UFJ銀行
ミュージックスタジオ・フォルテ
ヤマハサウンドシステム株式会社
読売新聞東京本社
立教大学
株式会社ルミネ 池袋店
レンゴー株式会社
株式会社ローソンエンタテインメント
株式会社 WOWOW
渡邊建設株式会社

他 匿名 4 法人

2023年1月現在
(敬称省略・50音順)

ご支援のお願い

東京芸術劇場は芸術文化創造活動のみならず、教育普及活動などを行っております。
今後とも、ご支援、ご賛同賜りますよう、心からお願い申し上げます。
詳しくはTel.03-5391-2111までお問い合わせください。

東京芸術劇場
Tokyo Metropolitan Theatre

〒171-0021 東京都豊島区西池袋1-8-1
Tel.03-5391-2111
<https://www.geigeki.jp/>

リサイタル・シリーズ

VS

2023年度ラインナップ

3年目を迎える「VS」シリーズでは、目が離せない豪華ラインナップをお届けします。

Vol.7では、世界の主要劇場、オーケストラに招かれ、圧倒的なピアノイズムで好評を集めるトップ・ソリスト同士 河村尚子とアレクサンドル・メルニコフの初共演をVSシリーズで実現。

Vol.8では、2022年 ロン＝ティボー国際音楽コンクール優勝者 亀井聖矢とヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール優勝者 イム・ユンチャン、世界の音楽ファンからも注目を集める若きピアニストふたりが初共演します。

ピアニスト同士の競演にぜひご期待ください。

Vol.7

河村尚子×アレクサンドル・メルニコフ

2023.11.14 [火] 東京芸術劇場 コンサートホール

一般発売：6.17 [土] (予定)



©Marco Borggreve ©Marco Borggreve

Vol.8

亀井聖矢×イム・ユンチャン

2024.2.1 [木] 東京芸術劇場 コンサートホール

一般発売：10.21 [土] (予定)



©TTairdate ©Lisa-Marie Mazucco

東京芸術劇場ボックスオフィス

0570-010-296 (休館日を除く 10:00～19:00)



東京芸術劇場

Tokyo Metropolitan Theatre

<https://www.geigeki.jp>

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
協賛：スタインウェイ・ジャパン株式会社

発行：東京芸術劇場 発行日：2023(令和5)年2月20日

デザイン：阿部太一[TAICHI ABE DESIGN INC.]

印刷：有限会社 深雪印刷

禁無断掲載

東京
芸術
劇場

Tokyo
Metropolitan
Theatre